

日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow



Haruka Kikuchi

1988年愛媛県生まれ。実家は県の伝統的特産品である「菊間瓦」を代々製造し、歴史的建造物などの修復にも取り組む老舗。祖父に憧れて鬼師となり、現在は兄と弟と共に研鑽を積んでいる。



鬼瓦(おにがわら)

中国から伝来し、奈良時代に普及した瓦。厄除けなどの意味から鬼の形をしていたが、使われる建物や時代とともに鷲や家紋などさまざまな模様が生まれた。鬼面でなくとも鬼瓦と呼ばれる。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版

パソコンやタブレットで

アットホーム明日への扉

検索

TV番組

ディスカバリーチャンネル(CS)



冠番組

「アットホーム presents 明日への扉」放映中
毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン

ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!!

最新号のご案内 好評公開中

No.049 / 江戸切子 三田村 義広 氏

鬼おに師し

菊地 晴香 氏

腕利きとして名をはせた祖父の技を目指し、鬼に挑む。

日本家屋の屋根に鎮座する鬼瓦。装飾や厄除けの意味を持つ瓦だが、棟の両端をふさぐことで、屋根の内側に雨水が染み通るのを防ぐ役割も果たす。一般的な瓦がプレス機で成型されるのに対し、鬼瓦には今も、鬼師と呼ばれる職人の手業が欠かせない。

愛媛県今治市菊間町。瀬戸内ならではの温暖な気候に恵まれ、焼くための薪も豊富なことから約750年前より瓦がつくられてきたこの地に、一人の若き鬼師がいる。故郷の特産品であり、いぶし銀の美しい光沢で名高い「菊間瓦」づくりに取り組む菊地晴香さんだ。

なぜこの道に？

菊地「小さいころからおじいちゃんが鬼瓦をつくるのを見て、人の手でこんなことができるんだと思っていました。おじいちゃんが作る鬼を見ていたうちにこの仕事が好きになり、決めました」

高校卒業後、四国屈指の鬼師とうたわれた祖父に弟子入りをし、現在は父に師事する。

菊地さんが今回挑んだのは全長2尺の鬼瓦。これほど大きい瓦は、初めての経験。まずは図面を描き、次に自らこねた粘土で瓦の台をつくり、そこに顔の盛り付けを行うと、瓦全体が滑らかになるまで金べらで磨く。これは鬼瓦づくりで最も重要な工程だが、必要な技や感覚は教えてもらって身に付くものではなく、自らの手を動かして続けるしか方法はないという。

時間をかけて磨いた瓦に髪を彫り、牙と角を盛り、仕上げに鬼の眼を入れる。2週間かけて乾かし、窯で焼くこと2日。その間にひびが入ったり、割れることもあるため最後まで緊張が解けない。はやる心を抑えて窯出しし、すすを払うと、そこにはいぶし銀に輝く鬼が現れた。魔物を寄せ付けない迫力に満ちながら、どこか作り手の優

しさを感ぜさせる2尺の鬼瓦。初めての挑戦は、菊地さんに軍配が上がった。

今後の目標は？

菊地「やはり、おじいちゃんのような鬼師になることです。その域に少しでも近づくためには、ひたすらつくるしかないと思っています」

修業を始めたころは、平面的な瓦をつくるのも難しかったという菊地さん。今では100年ぶりに行われた神社の鬼瓦復元を任せられるまでになった。しかし祖父の域に達するには、まだ先は遠い。明日への扉を開け、また一步、夢に近づく。

※2011年7月取材。掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE MORE!!
鬼瓦を愛し、全力でつくり続ける姿を動画で詳しくご紹介しています。ぜひご覧ください。